

最優秀賞

Y君の賀状 ― 「失敗から」学んだこと

東京都

片岡 雅子

「明るいあったかい心を届けます」手描きの猿が描かれた賀状は二〇〇四年のものだ。私が高校教師になって初めて卒業させたY君からの賀状で、Y君はその年の暮れに四三歳の若さで病のために亡くなっている。

Y君は幼い頃からの病気で他の生徒より二年遅れて私のクラスに在籍していた。新米教師の若い私の言うことを聞かないやんちゃな生徒が多い中、彼は物静かで他の生徒と一定の距離を保ち、成績の良い生徒だった。

担任の仕事はいろいろあるが、私が毎日気を配った事は生徒の出欠状況と教室のそうじだ。教室が汚いと気持ちが荒れてくる。だから当番表を作り、帰りの会で当番の確認をする。しかし会が終わると生徒はあつという間に教室を飛び出していなくなる。当時の私にはそうじをさせるのは一苦勞の仕事だった。

そんなある日、体育の授業の後、教室で生徒を待っているY君が独り、そうじ当番にやってきた。そ

の時、私が彼に言った言葉、今でも消したい言葉。「Y君、あなた班長なのだから他の子も誘ってこないダメよ。」その時の何も言わない彼の寂しそうな顔。ああ何でこう言わなかったのだろう? 「よく残ってくれたね。ありがとう。他の子には私が言うから今日は二人でいっしょにやろう。」

これがその後の私の教師生活の原点となった。失敗から学んだことと言うにはあまりにも重く、後悔の念ばかり浮かぶ出来事だったが「生徒を悲しませない、生徒を独りにさせない、共にやっていく教師」を目指していくことになる。四年前、私は三七年の教師生活を終えた。Y君のあの時の寂しそうな顔はいつも私の脳裏に焼きつき、生徒と共にあることに立ち返らせてくれた。

Y君は卒業後も毎年賀状をくれた。「いつまでも若いと思って生徒と張り合わないように」「年寄りの冷や水にならないように」いつもユーモアを込めた手描きだった。そして冒頭のものが彼からの最後の賀状になった。